

# 令和2年度普及活動成果集



京築農業の「明日」を創る！

 福岡県京築普及指導センター

令和3年3月

## はじめに

京築地域の農業者並びに関係機関の皆様には、平素より普及指導センターの活動にご理解とご協力をいただき、心より感謝を申し上げます。

令和2年は、世界的な新型コロナウイルスの感染拡大とともに始まり、7月の豪雨災害や8月以降のトビイロウンカによる水稻被害など、京築地域の農業にとっても厳しい一年でした。

そのような中、農業者、関係機関の皆様のご協力を頂き、新たな担い手の確保・育成について、新規就農者や新規園芸農家の確保・労力支援による園芸産地振興を図ってまいりました。

また、土地利用型担い手の育成に加え、県育成キウイフルーツの「甘うい」やケイトウ、夏秋なすなど多くの園芸品目の推進を図るとともに酪農経営の強化に取り組む、京築地域の農業振興に資する一定の成果が得られました。

中でも、ケイトウと夏秋なすは県内一の産地となり、今後も生産拡大に向け取り組を進めてまいります。

本成果集では、このように、これまでに普及活動で得られた成果をお示しするとともに、管内農業・農村の動きや普及指導員調査研究及び現地実証・展示の結果を掲載しておりますので、ご一読のうえ産地振興等の参考にしていただければと存じます。

普及指導センターは、今後とも農業・農村の振興のため、地域に出向き皆様と一緒に考え行動してまいりますので、ご理解とご協力をお願いします。

令和3年3月

行橋農林事務所 京築普及指導センター

センター長 古屋 真紀

# 目次

はじめに	表紙裏
目次	1

## 1 普及活動の主な成果

経営体育成支援	2
集落営農組織の維持・発展を目指して	3
新規園芸農家の確保による産地維持拡大	4
いちごの新規栽培者支援を充実	5
「川底」の干し柿加工による産地育成支援	6
ホオズキの産地の維持	7
酪農経営の安定化	8

## 2 管内の動き（トピックス）

.....	9
-------	---

## 3 普及指導員調査研究結果の概要

.....	12
-------	----

## 4 現地実証・展示ほ結果の概要

.....	14
-------	----

## 5 各種表彰の紹介（国、県）

.....	16
-------	----

## 6 参考資料

(1) 令和2年の気象及び農業生産の概要	17
(2) 現地活動情報一覧	21
(3) 普及指導センターの活動体制	22

# 1 普及活動の主な成果

## 経営体育成支援

—京築農業の屋台骨となる強い経営者の育成—

### ■課題化の背景

これまで普及指導センターでは、法人化、規模拡大や技術改良等を進めることにより、農業者の経営改善を支援してきました。しかし、近年は社会情勢や自然環境の変化も大きく、中には、困難な課題が立ちはだかり経営改善がうまく進まない事例もありました。

そこで、雇用などの経営課題について、中小企業診断士等に相談するなど、経営体が専門家から個別に直接支援を受けられる機会の増加や場づくりといった取組強化が求められていました。

### ■活動内容

今年度は対象とする経営体を重点化し、普及指導センターの担当者がカウンセリング、コンサルテーションを実施しました。これまでの収益確保に向けた技術改善支援に加え、経営改善の項目により、中小企業診断士や社会保険労務士等の専門家から作業の効率化や雇用条件整備の助言をもらい、経営体と普及指導センターが並走して経営改善に取り組みました。

さらに、労務管理及び法人化・経営継承の経営研修会を開催するとともに、県主催の「ふくおか経営農業アカデミー」への参加を誘導し、経営計画・戦略（ビジネスプラン）の作成支援を行いました。

※「ふくおか経営農業アカデミー」とは、経営発展意欲のある農業者の経営管理、マーケティング、労務管理等に関する能力を磨き、優れた経営者の育成を目的としたアカデミー

### ■主な成果

今年度、16経営体に経営改善支援を行った結果、12経営体が年度当初に立てた経営改善目標を達成しました。



中小企業診断士派遣の様子



経営継承研修会

### ■今後の取組み

経営改善に意欲的に取り組む経営体に対して、引き続き、普及指導センターは並走して経営改善目標達成に向けた支援を行っていきます。

(地域振興課 地域係)

## 集落営農組織の維持・発展を目指して

—地域農業の持続可能な担い手の育成—

### ■課題化の背景

京築地域では約100の集落営農組織が設立され、現在ではその半数以上が法人経営に移行し、水田農業の主要な担い手として活動しています。

しかし、高齢化の進展による組織運営を支える役員・オペレーターの人材不足や、大豆・麦の収量低迷により組織の運営が年々厳しくなっており、人材の掘り起しや収量向上のための対策が必要です。

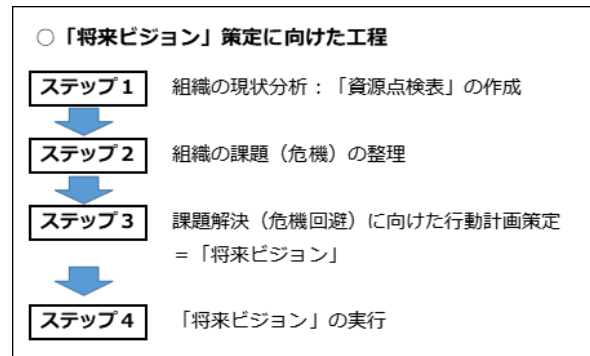
### ■活動内容

令和元年度から2年間かけ、合計17組織に対し、集落営農組織の中・長期的な運営を改善するための「将来ビジョン」策定と、短期的な収益を改善するための「適期作業計画」策定についてそれぞれ支援しました。具体的な方法は以下のとおりです。

#### 1 組織の「将来ビジョン」策定支援

対象組織の役員会等に参画し、各組織のヒト（人材）、トチ（農地）、モノ（品目、機械、施設）、カネ（収益、利益）の項目ごとに、右図のステップ1～3の手順で、「将来ビジョン」の策定を支援しました。

また、将来ビジョンを策定した後、その実践（ステップ4）を支援しました。



#### 2 適期作業計画策定支援

水稻・麦・大豆の収量低迷は、播種をはじめとする各種作業の遅れが主要な要因であると考えられるため、年間を通じ、各組織のオペレーター数や機械の装備状況などに応じた適期作業計画の策定とその実行を支援しました。

### ■主な成果

#### 1 組織の「将来ビジョン」策定支援

計17組織全てで、将来ビジョン及び適期作業計画が策定されました。

支援した各組織のビジョン検討の過程では、ヒト、モノ、トチ、カネの各項目のうち、特にヒト（人材）について、将来に向け具体的な対策を講じることが、実効性のあるビジョンを策定する上で重要であるとの意識が高まりました。そのため、ビジョンの実現に向けた集落内の人材掘り起し、特にオペレーター候補の掘り起しが進みました。

#### 2 適期作業計画策定支援

適期作業計画の策定支援を通じ、オペレーターの各作業に対する理解度が増し、特に麦で適期作業の実施が進み、収量向上を実現できたことから、水稻・麦は不作の中にあっても、14組織で目標粗収益を達成しました。

### ■今後の取組み

今後もより多くの集落営農組織で「集落ビジョン」の策定が行われるよう、特に人材確保の面に重点を置き、研修会や個別支援を通じて広く推進していきます。

（地域振興課 水田農業係）

## 新規園芸農家の確保による産地維持拡大 —関係機関と一体となって取り組んだ新規園芸農家の確保—

### ■課題化の背景

管内農家の高齢化率は県平均58%と比較して71%と高いため、今後、園芸品目の生産量は急激に縮小していくことが予想されます。

このため、第二種兼業農家率が高い地域性に着目し、関係機関と一体となって第二種兼業農家の退職者を対象とした新規園芸農家の確保に取り組みました。

### ■活動内容

新規園芸農家確保に向けて、定例で開催する連絡会議などの機会を活用して市町やJ Aと協議を行い、平成30年から市町が園芸作物栽培希望者を募集し、普及指導センターとJ Aが育成する取組みを開始しました。希望者募集の説明会は、平成30年はみやこ町のみでの実施でしたが、この事例を参考にさらに推進した結果、現在では4市町（みやこ町、行橋市、吉富町、築上町）にまで拡大しました。

今年度取組みを開始した築上町では14名が説明会に参加し、普及指導センターでの推進品目の説明、先輩農家からアドバイス等の講和や意見交換を行い農業への理解と栽培への意欲の向上を図りました。

また、育成の取組では、園芸作物の栽培経験のない参加者が、基本的な園芸栽培技術を学ぶ場が必要でした。そこで、J Aと普及指導センターが講師を務めるJ A農業塾へ入塾を誘導する仕組みを整えました。農業塾のカリキュラムについてはJ Aと検討を行い、園芸農家は場見学や推進品目の説明等を導入しました。

### ■主な成果

これまでの栽培説明会参加者及び農業塾卒業生の中から、令和2年度は、25名が園芸作物栽培を開始しました。また、農業塾卒業後、新規に園芸品目を開始する農家は、令和元年度は2戸でしたが、今年度は6戸に増加しました。



園芸作物栽培希望者説明会（築上町）での先輩農家からのアドバイス

### ■今後の取組み

今後も、園芸作物栽培希望者説明会の開催市町を増やし、新規栽培者への重点支援を行うことで、京築地域での新規園芸農家の確保・育成を進めていきます。

（園芸振興課 野菜係）

## いちごの新規栽培者支援を充実

—部会と関係機関で新規栽培者をサポート！—

### ■課題化の背景

J A福岡京築いちご部会（8.3ha、69戸）は、新規栽培者が毎年1～2名程度加入しており、新規栽培者の経営安定には早期の技術習得が喫緊の課題です。栽培技術の早期習得には、実際の作業を体験しつつ理解を促すことが重要であることから、いちご部会とJ Aと共に行う支援強化の取組が求められていました。

### ■活動内容

#### 1 新規栽培者の早期技術習得支援への合意形成

技術習得のための支援体制・体系を構築するためには部会の合意が必要です。このため、座学を中心とした講座と現地実習を組み合わせた技術習得のためのカリキュラムの提案を行い、部会として取り組む、主に現場での新規栽培者育成の体制整備について合意形成を行いました。

#### 2 担い手生産者の意見を取り入れた新規向け手引きの作成

新規栽培者の早期技術習得に向け、これまでの研修資料や現地試験等だけでなく、既存の生産者が栽培を開始した際に知りたかったこと、疑問に感じたこと、栽培技術の成り立ちや管理の作業手順・ポイント・用語などを生産者と共にまとめた、「あまおう栽培の手引き（京築版）」を作成しました。この手引きは、いちご栽培を初めて行う人でも理解しやすくするため、写真や図を多用しています。



意見交換の様子

### ■主な成果

#### 1 新規栽培者支援体制の整備

J A及び部会役員会にて合意された新規栽培者の支援体制は、いちご部会総会にて各部会員と共有されました。会議を重ねることで、部会による新規栽培者の育成についての意識が高まり、新規栽培者の技術習得に部会員が協力して支援できる体制が整備されました。

#### 2 「あまおう栽培の手引き（京築版）」の作成

新規栽培者に対し、「あまおう栽培の手引き（京築版）」を活用したいちご勉強会を適期に開催することにより、栽培技術の理解促進が図られました。

さらに、関係機関及び部会員にも配布し活用を呼び掛けたところ、既存生産者の収量向上に繋がり、管内のいちご生産強化にもつながっています。

### ■今後の取組み

今後も産地の安定に向け、技術習得・改善支援や人材育成、新規栽培者への支援充実を行っていきます。

(園芸畜産課 野菜係)

## 「川底」の干し柿加工による産地育成支援

### ■課題化の背景

豊前市・上毛町など管内でも一部地域でのみ栽培されている渋柿「川底」は、渋抜きした青果が地域特産品として主に流通しています。しかし、渋抜きした青果は貯蔵性が劣るため、甘柿「富有」等と比べ販売しづらくなっています。また、「川底」は干し柿にも加工されています。この干し柿は食味評価が高く、青果よりも高単価が期待できます。しかし、加工時期が「富有」等の収穫時期と重なるため、需要に対する生産量の少なさが課題となっていました。

そこで、地域特産品の強みを活かしつつ、生産者の所得向上を図るために、干し柿増産の取組が求められていました。

### ■活動内容

#### 1 干し柿研究会を中心とした加工及び販売支援

令和元年に「川底」生産者13名を中心に干し柿研究会を立ち上げ、この組織を中心に干し柿加工及び販売に向けた支援を行いました。

#### 2 干し柿加工技術の確立に向けた支援

加工時期を「富有」等の収穫後にするため、加工原料の冷蔵貯蔵試験を行いました。また、干し柿製造に必要な技術について、先進地調査等で情報を収集しました。

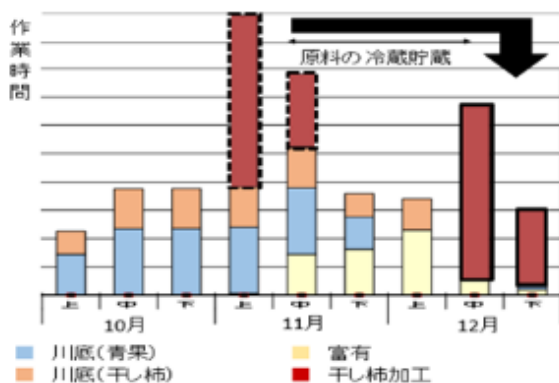
### ■主な成果

#### 1 干し柿研究会を中心とした干し柿の増産、加工及び販売支援

令和元年度以降増産を続けており、令和3年までに約5,000個の干し柿が生産されました。この干し柿は「大平干し柿」として商品化され、地元の直売所の他福岡市のデパート等でも販売され、販路を拡大することができました。

#### 2 干し柿加工技術の確立に向けた支援

10月下旬に収穫した「川底」を冷蔵貯蔵し、「富有」等の他品種の収穫が終わった12月中下旬に加工することで、作業分散により品質の高い干し柿の加工技術を確立しました。



加工期間延伸による作業時間分散のイメージ図



デパートでの販売の様子

### ■今後の取組み

干し柿導入による販路拡大や栽培加工技術の支援を行うことで、引き続き所得向上を目指します。

(園芸畜産課 果樹係)



## ホオズキの産地の維持

### ■課題化の背景

京築地域のホオズキは、生産量、品質ともに県内一の産地です。しかし、高齢化や病害発生等の影響で出荷量は年々減少傾向にあり、産地規模の維持が急務となっています。

地域の慣行栽培では、12月下旬～1月下旬に堀上げた地下茎を調整してほ場に定植し、その後マルチを展張しています。この栽培法ではマルチからの芽出しや間引き作業等の手間が多く、これらの労力負担軽減がホオズキ産地の維持には必要です。

このため、芽出しや間引きを省略できる挿し芽苗（ホオズキ地上部の茎先端から採取した苗）を用いた新しい生産技術を検討しました。

### ■活動内容

#### 1 新しい生産技術の検討

挿し芽苗を用いた栽培展示ほを2か所設置し、技術の実証に取り組みました。栽培展示ほでは、さし芽苗栽培（3月挿し芽、4月上旬定植）と慣行栽培（2月上旬地下茎定植）について生育、切花品質を比較検討しました。

#### 2 土壌消毒の推進

ホオズキの難防除病害の白絹病に有効な土壌消毒について、昨年引き続き現地実演会等を実施し、導入を推進しました。

### ■主な成果

#### 1 新しい生産技術の検討

さし芽苗を用いた生産技術では、前年度栽培ほ場から萌芽してきた新芽を親株として用いるため、地下茎堀上げや芽出し作業等の必要がなく省力化となります。さし芽苗による栽培は、慣行栽培より草丈は短くなりますが、実着きや着色等、品質的にはこれまでと同等のホオズキが栽培できることを実証しました。

また、ほ場占有期間が4月から8月までの5か月間と慣行栽培の8か月間より短くなることから、施設での栽培についても検討していきたいと考えています。

#### 2 土壌消毒の推進

長雨が続く今年の気象条件でも白絹病の発生を抑えることができました。斑点細菌病等の多発により、品質が低下したことから、生産量は減少しましたが、生産面積、生産者数は僅かながら増加しました。



さし芽による定植苗



さし芽苗栽培



慣行栽培

### ■今後の取組み

今後、新しい生産技術の確立や病虫害防除対策を徹底することで、病害が発生しやすい平坦地も含めた作付けを推進し、京築地域の特産花きとして産地維持を図っていきます。

(園芸畜産課 花き畜産係)

## 酪農経営の安定化

### ■課題化の背景

京築地域の酪農は、管内の畜産経営体の半数を占める畜産振興上重要な部門です。また酪農経営は投資額が大きく、飼養頭数や飼料内容など経営の態様や課題が個々に異なるため、経営体ごとに中長期的な経営計画の作成を支援し、その計画に沿った継続的な支援が必要です。具体的には、周産期（分娩前後）対策、繁殖対策、暑熱対策を推進し、疾病廃用牛の減少と生乳生産量の増加に対し、ふくおか県酪農業協同組合および県関係機関と共に行うことが求められています。

### ■活動内容

#### 1 周産期対策

乳牛で最も重要な時期である周産期をうまく乗り切る支援として、飼料摂取量や太り具合のチェックや、肝臓の負担を軽減する資材の給与試験を行いました。

#### 2 繁殖対策

定期的な繁殖検診を行い、問題牛の早期治療や飼養管理方法について酪農家と酪農技術者でディスカッションを行い、成績向上を図りました。

#### 3 暑熱対策

石灰に特殊樹脂等を混ぜた特殊石灰資材を用いた屋根の白色化による牛舎内温度の低下や、扇風機の増設等の支援を実施しました。



繁殖検診の様子



高泌乳牛への集中送風

### ■主な成果

肝臓の負担を軽減する資材の給与試験の結果は良好であり、その結果を基に本格的にこの資材を利用した農家では、併せて行った飼養管理法の改善や繁殖検診の効果もあり、大幅に疾病が減少し、泌乳成績も向上しています。

また、屋根白色化の効果を調査した結果、牛舎内温度を2～3℃下げる効果が見込まれました（10ページのトピックス参照）。

### ■今後の取組み

引き続き関係機関と共に、各農家の課題や方向性について把握と共有を進め、有効な改善提案を行い、酪農経営の安定化を図っていきます。

（園芸畜産課 花き畜産係）

## ■ 家族経営から雇用・会社経営へ～経営者のお悩み解決！～

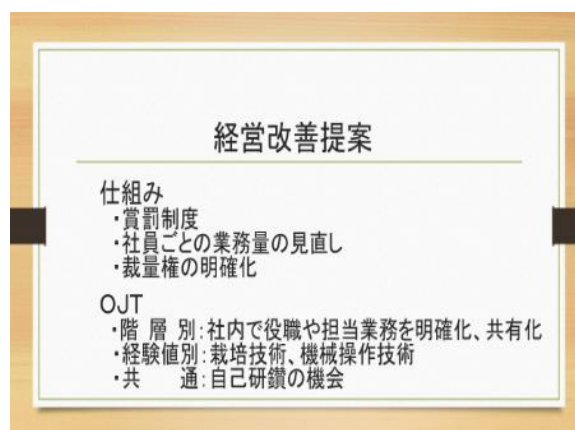
普及指導センターでは、農業経営者の経営改善支援を行っていますが、そのなかで最近多いのが雇用に関する相談です。これまで家族だけで農業経営を行っていたものが、規模拡大に伴い雇用を導入したり、法人経営になったことで、これまでにはなかった悩みが生まれました。それは、「従業員が思うように働いてくれない」「教育の仕方が分からない」「会社全体を同じ方向に向かせたい」等です。雇用問題は、農業経営者にとって切実な悩みです。

そこで、管内2法人において経営者、従業員それぞれにアンケート調査を行い、両者において認識の違いがどのように存在するのかを明らかにしました。さらに、そのギャップを埋めるためにはどのような仕組みが必要で社内教育をどのように実施したらよいかを検討し、経営者と従業員が一つになって、同じ方向に進めるよう支援を行いました。

普及指導センターでは、「見えない」ことを、「見える」に、「困った」を「良かった」にする取り組みを続けていきます。



雇用課題で解決策を検討する経営者



調査結果から導き出された改善提案

## ■ 有限会社田中農産が全国麦作共励会で農林水産大臣賞を受賞

今年度の全国麦作共励会（一般社団法人全国麦作改良協会、全国農業協同組合中央会主催）農家の部で、築上町の有限会社田中農産（代表：田中祐輔氏）が農林水産大臣賞を受賞しました。

全国麦作共励会は、麦作の生産技術向上や経営改善の面において、先進的で他の模範となる麦作農家及び集団を表彰するものです。

（有）田中農産の取組みは、徹底した排水対策により播種、中間管理、収穫を確実に適期に実施し収量・品質の高位安定化を達成していること、もち麦品種「くすもち二条」の原種・種子生産に取り組み高収益を確保していることなどが高く評価されました。

普及指導センターでは、（有）田中農産の栽培技術を参考とし、管内麦作農家の栽培技術のレベルアップを支援することにより、麦の収量・品質のさらなる向上を目指します。



田中農産の麦収穫の様子

## 2 管内の動き（トピックス）

### 夏秋なす部会の担い手の確保支援

夏秋なすは、近年単価が300円/kg前後と高く安定しており、夏場の所得確保が可能な有望な品目です。

しかし、JA福岡京築夏秋なす部会では高齢化が進み、産地規模の縮小が懸念されており担い手の確保が課題となっています。

このため、JAと連携し作付け推進ポスターの作成・掲示や栽培希望者説明会を開催し、新規栽培者の勧誘を図りました。また、栽培希望者説明会を開催し、夏秋なすのメリットや留意点を説明しました。

以上の取り組みの結果、令和3年度には10名が新規に栽培を開始する予定です。



令和2年度作付け推進ポスター

### 牛舎の暑熱対策

乳牛の健康を守り生産性を高めるための重要な対策は、屋根からの太陽熱の侵入を防ぐことや牛に風を当てる等の暑熱対策です。本年度京築地域では、酪農家3戸が、石灰に特殊樹脂等を混ぜた特殊石灰資材を用いた屋根の白色化を実施しました。この資材は、屋根に塗布することによって屋根の日射反射率と断熱効果の両方を高め、効果持続期間も5年以上と長いことが特徴です。普及指導センターでは塗布前後の牛舎内温度を継続的に測定し、効果の検証を行いました。その結果、牛舎内温度を下げる効果は2℃から3℃程度と見込まれ、十分な投資効果があると認められました。

また、令和元年度に酪農家と関係機関で行った牛舎内風速実態調査の結果を参考に、扇風機の位置調整や増設等の風速向上への取り組みも進んでいます。



特殊石灰資材 施工前



特殊石灰資材 施工後

## 樹園地評価基準を作成し新田原果樹部会で活用

樹園地の賃借料を貸し手と借り手で協議して決定する際には、価格決定の参考となる樹園地評価基準が必要となります。そこで、普及指導センターでは新田原果樹部会と協議して評価基準を作成しました。

この評価基準は岡山県農業技術センターで作成されたブドウ・モモ園の評価基準を参考にイチジク用に改編したものです。現在、この評価基準を適用して新田原果樹部会サポート部で管理しているイチジク園の賃借料を算出しており、今後、利用権設定の際にも活用していく予定です。

園地評価		評価年月日: 2020.5.25		園地の種類: イチジク園		園地場所: 福岡県行橋市		面積: 南部(7a)+本区(3a)	
評価結果一覧									
項目	満点	本区				南部			
		評価内容	ウェイト	評価点	評価割合	評価内容	ウェイト	評価点	評価割合
<b>生産条件</b>									
1.自然条件									
(1) 方角	2.64	南東～南西	1	2.64	南東～南西	1	2.64		
(2) 傾斜度	7.51	0～4度程度	1	7.51	0～4度程度	1	7.51		
(3) 日照条件	5.78	良好	1	5.78	良好	1	5.78		
(4) 霧・風害の発生程度	2.54	低い	0.79	2.01	低い	0.79	2.01		
計	18.47			17.94			17.94		97.1%
2.土壌条件									
(1) 排水性	5.58	良好	1	5.58	良好	1	5.58		
(2) 土性	4.06	埴壤土	0.78	3.17	埴壤土	0.78	3.17		
計	9.64			8.75			8.75		90.7%
3.作業条件									
(1) 大きさ	8.52	5a未満(3a)	0.46	3.92	5～10a未満(7a)	0.76	6.48		
(2) 形状	4.36	概ね四角形	1	4.36	概ね四角形	1	4.36		
(3) 用水の利便性	6.49	畑かん施設以外の水源	1	6.49	畑かん施設あり	1	6.49		
(4) かん水装置の設置状況	7	なし	0.58	4.06	あり	1	7.00		
(5) 農道条件	12.07	幅員2m以上	1	12.07	幅員2m以上	1	12.07		
(6) 園内での機械走行条件	4.66	機械走行不可	0.25	1.17	運搬車走行可能	0.71	3.31		
計	43.1			32.06			39.70		92.1%
<b>樹体条件</b>									
(1) 付帯設備の整備状況	4.66	防風施設がなく、棚の補修が必要	0.35	1.63	棚・防風施設があるが、補修が必要	0.73	3.40		
(2) 品種	6.63	蓬莱柿	1	6.63	蓬莱柿	1	6.63		
(3) 樹齢	4.69	10～19年生	1	4.69	9年生以下、10～19年生	0.95	4.46		
(4) 樹体管理	6	基本骨格は形成されているが病害虫の発生が見られる	0.73	4.38	基本骨格は形成されているが病害虫の発生が見られる	0.73	4.38		
(5) 前年の収量・品質水準	3.55	近隣園と同等	0.88	3.12	近隣園と同等	0.88	3.12		
(6) 園地の放任期間	3.26	なし	1	3.26	なし	1	3.26		
計	28.79			23.72			25.25		87.7%
総合評価	100			82.46			91.64		91.6%
園地料金の目安	評価後園地料金総計	35,554		9,896			25,659		
	満点10a当たり	40,000		12,000			28,000		

例) イチジク園の評価結果一覧 (イチジク「蓬莱柿」2園地)

### 3 普及指導員調査研究結果の概要

課題名	結果の概要	部門	担当者
上毛町産レモンの消費者ニーズとポジショニングについて	上毛町産レモンについて消費者ニーズと他産地とのコンセプトの違いを調査し、①「上毛町産」というコンセプトは、他産地と異なる特徴があれば有効。②皮を食用とする場合の安全性や風味などの特徴を作れば消費を促す。③販売個数は1個が良いが、賞味期限や保存期間が明示できれば、まとめ買いを促すことができる。などを明らかにした。	地域	手嶋
雇用型農業で経営を円滑に運営するための条件整備	従業員の定着率や労働効率を上げるために、経営者と従業員に経営方針や労働環境のアンケートを実施。その結果、経営者と従業員ともに従業員の作業スキル、専門知識レベルは低いと考えていることや従業員は効率的かつ自発的に動くよう心掛けているが経営者は普通と感じているなどの課題が明らかとなった。	農業経営	安武
青年農業者の経営確立支援について	福岡県では農業経営アカデミーによる事業計画の作成支援が行われており、アカデミー受講後は、売上目標だけでなく経営理念、過不足のない雇用の実施、従業員の資質向上について意識するようになり、経営内容を改善している。従って、農業経営アカデミーの受講は経営体にとって有益であることが明らかとなった。	農業経営	谷口
大豆の収量向上に向けた有機物施用法の検討	管内の大豆の収量の伸び悩みに対して、主に適期播種と雑草対策を行ってきたが、地力の低下も大きな要因であると考えられることから有機物施用の試験をおこなった。しかし、梅雨の長雨による播き遅れと播種後の高温乾燥による出芽不良等により明確な差は認められなかった。	水田農業	道谷
集落営農組織と個別大規模農家の連携支援手法の検討	労働力確保に苦慮する集落営農組織と規模拡大志向の個別大規模農家が連携するための手法について、実例をもとに検討した。連携には、一部作業受委託から始め、徐々に関係を深めることが重要で、その際は関係機関が両者のマッチングに関与することが必要であると考えられた。	水田農業	福山
飼料用米「夢あおば」の倒伏対策等の検討	6月下旬に移植した夢あおばで、栽植密度及び疎植における減肥について検証。50株/坪程度の疎植でも60株/坪と同程度の収量確保が可能であり、50株/坪程度の疎植で収量を確保するためには減肥はしない方が良いと思われる。	水田農業	太田
雇用型法人向け農作業マニュアル作成支援法の検討	作業マニュアル作成においては、事前に法人とマニュアルの使用目的・対象者について十分に協議し、目的や対象に応じたマニュアルを作成することが重要である。今回は対象を「農作業未経験の新規従業員」、使用目的を「新人教育用補助教材」とし、新人が行う作業のみを簡潔に記載することとした。	水田農業	鬼木
雇用型経営におけるキャベツの作業マニュアル作成方法の検討	作業マニュアル作成方法は、まず主要な作業ごとに担当者とシナリオを作成してビデオ撮影を行い、そのビデオを観ながらマニュアル作成を行う方法が効率的だった。写真はビデオから切りとることが可能であり、また、ビデオ自体が判りやすいマニュアルとして利用できる。 事前の打ち合わせは、聞き取り側がキャベツ栽培に精通していることが効率的に行う上で重要である。	野菜	川原

課題名	結果の概要	部門	担当者
京築管内の加工用しょうが栽培における経営実態調査	しょうがの単位面積当たり労働時間は、およそ500時間と根系野菜では比較的長い。特別栽培の取り組みで販売単価は高いものの、種しょうがの保存が効率的に行えない場合は種苗費が高額になり、栽培期間が長いわりに所得額が下がるため、種しょうがの保存技術の確立が経営安定に必要。	野菜	濱野
ブロッコリー栽培における土壌実態調査	ブロッコリー栽培において土壌砕土率を調査した。篤農家のほ場では、平均的農家のほ場に比べて、径10mm未満の土塊の割合が多いことが確認された。また化学性について調査を行ったところ、全体的にpHが低い傾向にあることが示された。	野菜	安藤
イチゴにおける新規生産者向け資料に必要な記載内容調査（新規向け手引きの作成）	新規生産者の早期技術習得を目指すため、新規農家や篤農家から栽培開始に必要な情報等について意見を集約し、あまおう栽培の手引き（京築版）を作成した。 写真を多く用いながら、栽培の考え方及びポイントを整理した資料を作成した結果、新規生産者の早期技術習得に加え、既存生産者の技術向上にも有効であるという意見が得られた。	野菜	竹本
京築地域の玉レタスの収穫時期予測の検討	収穫予測モデルの指標としては全葉数が優れていた。日平均気温の積算温度と球重、結球葉数、全葉数から品種ごとに収穫時期予測式を作成した。エクセルを用いて、品種、定植日、トンネル被覆時期、トンネル換気の項目を入力することで予測ができるモデルを作成した。	野菜	井上
イチジクのネコブセンチュウ類被害実態調査	イチジクのネコブセンチュウ類の寄生によって生じる根のゴールの発生状況および新梢長への影響について調査した。その結果、すべての調査樹にゴールが生じ、ネコブセンチュウが広範に蔓延していた。しかし、ネコブセンチュウの寄生が新梢長に及ぼす影響は判然とせず、新根の発生量が新梢長の伸びに大きく影響していることが明らかとなった。	果樹	姫野
イチジクネコブセンチュウ類防除法の検討	石灰窒素施用の有無は、ネコブセンチュウゴール数及び樹勢に対して影響を与えなかった。高圧洗浄機で根部を調査した結果、勢いが弱い樹については、発根が少なく殺センチュウ剤の効果が薄かったため、低樹勢樹に対してはまず土壌改良等で発根を促した後、殺センチュウ剤の防除を行う必要があると考えられる。	果樹	高原
ホオズキの挿し芽苗を用いた省力栽培技術の確立に関する研究	4月下旬頃までにホオズキ挿し芽苗を定植することにより、慣行栽培より草丈は1～2割程度短くなるが、品質的には十分なホオズキ生産が可能である。4月上旬頃にさし芽苗を定植できれば、慣行栽培と同等の草丈、品質を確保できるものと思われる。	花き	兼近
周産期の乳牛へのグリセリン+バイパスコリン混合飼料給与が周産期疾病削減や繁殖成績に及ぼす影響	供試した6頭について周産期疾病の発症やBCSの急激な低下がみられず、初回授精日数も100日程度であったため、周産期の乳牛へグリセリン+バイパスコリン混合飼料給与が周産期疾病削減や繁殖成績に好影響を及ぼしていることが示唆された。ただし、周産期疾病防止のためには、乾物摂取量の最大化及び適切なBCSの管理が大前提である。	畜産	手島

## 4 現地実証・展示ほ結果の概要

品目	課題名	結果の概要	設置場所
水稲	水稲奨励品種決定調査現地試験	水稲品種「夢つくし」の後継品種候補として、高温耐性・いもち病耐性があり良食味とされる「ちくし95号」について現地試験を行った。 「ちくし95号」は「夢つくし」より稈長が短い、倒伏程度はほぼ同等であった。穂長が長く穂数も多かったが、収量性は若干劣った。成熟期は「夢つくし」より5日遅かった。食味試験の結果は「夢つくし」より「ちくし95号」の方が優れた。	豊前市
	水稲種子の品質向上	「夢つくし」で、基肥一発肥料と分施（基肥+穂肥）について比較検討を行ったが大きな差はなかった。現在、管内の採種農家も高齢化し、基肥一発肥料を使用している生産者が多いのが現状で、窒素成分で6kg/10a程度の施肥量であれば基肥一発肥料でも問題ないと考えられる。	豊前市
大豆	大豆新品種「ちくしB5号」の現地実証	8月上旬播種であったが、「ちくしB5号」は「フクユタカ」より収量が多く、百粒重も大きく地域適応性はあると判断できる。また、最下着莢高が高く収穫ロスも少なかった。施肥に関しては、カリ肥料及び緩効性肥料の増収効果も見られた。	上毛町
小麦	小麦「ちくしW2号」の品質向上	タンパク含有率向上に向けた追肥体系について、追肥①と追肥②での緩効性肥料の施用効果を検証。緩効性肥料は降雨等の影響が大きく、生育状況を見ながら適期に施肥する慣行の麦追肥名人+穂揃い期追肥（硫安）が安定していた。	みやこ町
イチゴ	イチゴの2番果房の安定分化技術の確立	いちごの2番果房分化には、日照時間が長いほど寒冷紗被覆の効果が高かった。寒冷紗除去の目安は、10月20日までの日照時間が42時間を下回る場合が想定された。	みやこ町
	イチゴの萎黄病対策の確立	土壌pHの調整によるいちご萎黄病対策効果については発病がなく判然としなかったが、高設栽培の栽培中の土壌pHの低下が著しいことが確認され、養分吸収が影響していることが示唆された。	行橋市
	イチゴの多芽発生対策の確立	多芽の発生については、育苗培土の品質だけでなく、かん水等の管理によることが高いことが示唆された。 また、育苗後半に生育が停滞した場合は、本ぼでの初期生育の抑制が確認された。	みやこ町
露地野菜	露地野菜の収量向上対策	ほ場によって数値にバラつきはあるものの、調査した全てのほ場で土壌pHが6.0以下であることが確認された。作付け前の土壌pH調整について徹底を図る必要がある。	行橋市 吉富町 上毛町 築上町
レタス	レタスの優良品種選定	近年の暖冬により、年内収穫の品種でピンクリブ等の生理障害や形状の乱れが発生しているため優良品種の選定を実施した。契約向き品種として「YLL243」、「レスナー」、ラップ向きの品種として「パワースイープ」、「チアフル」が有望だった。	豊前市 上毛町 築上町
スイートコーン	スイートコーンの優良品種選定	6月上旬収穫の作型で優良品種を検討した。「わくわくコーン82」が食味と貯蔵性が良く、有望であった。令和3年度も継続して試験を実施し、産地導入を検討する。	豊前市 築上町
白ネギ	白ネギの優良品種の選定	高温期の枯死株発生対策として、高温に強い「龍輝」、「関羽」、「宝山」3品種で品種比較試験を行った。3品種とも高温耐性が高く高温期の枯死株は見られなかったが、「関羽」の生育が最も良かった。このため、「関羽」を3年度から導入することとなった。	みやこ町



品目	課題名	結果の概要	設置場所
イチジク	イチジクにおけるネコブセンチュウ類防除法の検討	石灰窒素施用の有無は、ネコブセンチュウゴール数及び樹勢に対して影響を与えなかった。高圧洗浄機で根部を調査した結果、勢いが弱い樹については、発根が少なく殺センチュウ剤の効果が薄かったため、低樹勢樹に対してはまず土壤改良等で発根を促した後、殺センチュウ剤の防除を行う必要があると考えられる。	行橋市 豊前市
キウイフルーツ	キウイフルーツ「甘うい」の樹勢強化対策	追肥量の違いによる樹勢の変化を確認することは出来なかった。原因を探るために地下部の調査を行ったところ、根の伸長範囲が追肥範囲より狭いことが判明した。これにより、根が肥料を十分に吸収出来ず、樹勢に変化が現れなかったものと考えられた。	行橋市
	キウイフルーツ「甘うい」の時期別果実糖度調査	果実糖度を9月上旬、中旬および下旬の3回調査を行うことで収穫適期の判断を行うことが可能である。	行橋市
カキ	「川底」販路確立にむけた生果の貯蔵及び加工方法の検討	個包装脱渋試験において、個包装後、脱渋袋内でドライアイス脱渋した果実は、処理後30日で渋みが抜けたものの、3～5割の未脱渋果が混入したことからドライアイスの処理濃度及び期間についての検討が必要である。乾燥機を活用した干し柿加工試験では、短期間で干し柿を生産できたが、食味向上においては設定温度等を検討する必要がある。	上毛町
	「秋王」の環状剥皮による着果安定技術の確立	定植2年目「秋王」低樹高ジョイント栽培における結実対策として、満開後20日頃の環状はく皮処理が有効である。	行橋市
ホオズキ	ホオズキ出荷時期に合わせた適正なエスレル散布時期の実証	エスレル処理日を5日程度ずらして分散処理することで、実の日焼けによる品質低下が少なかった。エスレル処理時期の分散は収穫期拡大に有効であると考えられた。	築上町
ケイトウ	ケイトウの7月出荷作型の確立	7月上旬の出荷に向け早めの播種、定植を行ったが、定植直後の温度条件により、収穫期が左右された。気象予報を踏まえ、低温が予測される場合は、不織布被覆等による定植後の温度確保が必要であると考えられた。	築上町
	ケイトウの品種比較試験	ピンク系品種「有明」は主力の赤系品種「麗炎」よりも晩生であるため、8月上旬の需要期に「有明」を出荷するためには、「麗炎」よりも2週間程度早く播種および定植を行い、花の肥大化と花首の硬化に時間をかける必要があると考えられた。	吉富町
乳牛	周産期の乳牛へのグリセリン+バイパスコリン混合飼料給与が周産期疾病削減や繁殖成績に及ぼす影響	供試した6頭について周産期疾病の発症やBCSの急激な低下がみられず、初回授精日数も100日程度であったため、周産期の乳牛へグリセリン+バイパスコリン混合飼料給与が周産期疾病削減や繁殖成績に好影響を及ぼしていることが示唆された。ただし、周産期疾病防止のためには、乾物摂取量の最大化及び適切なBCSの管理が大前提である。	行橋市 みやこ町

令和3年2月末時点

## 5 各種表彰の紹介（国、県）

表彰事業名・受賞名	受賞者氏名・組織名	市町村名
全国麦作共励会 農家の部 農林水産大臣賞	有限会社田中農産 田中 祐輔	築上町
福岡県麦作共励会 農家の部 最優秀賞		
福岡県花き品評会 福岡県花卉農業協同組合長賞	原田 隆	みやこ町

(敬称略)

※令和2年4月から令和3年2月の期間の表彰事業において表彰を受けた個人及び組織

## (1) 令和2年の気象及び農業生産の概要

### ■気象概況

1月～2月にかけては気温が高く推移し、統計開始以降最も高温となった。

3月と5月は気温がかなり高くなったが、4月は寒気の影響を受けやすかったため、低かった。

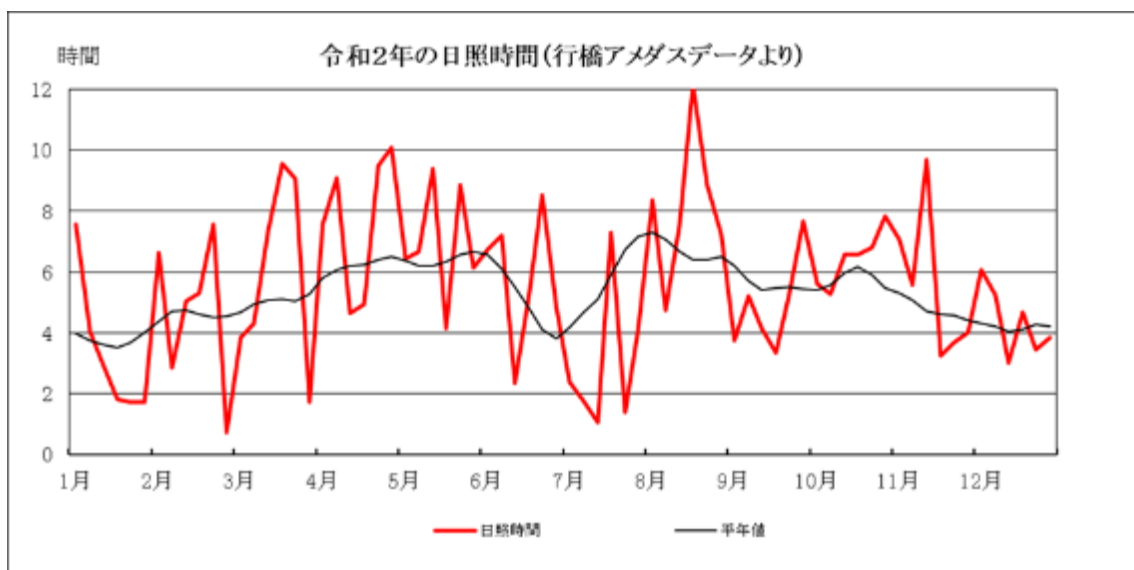
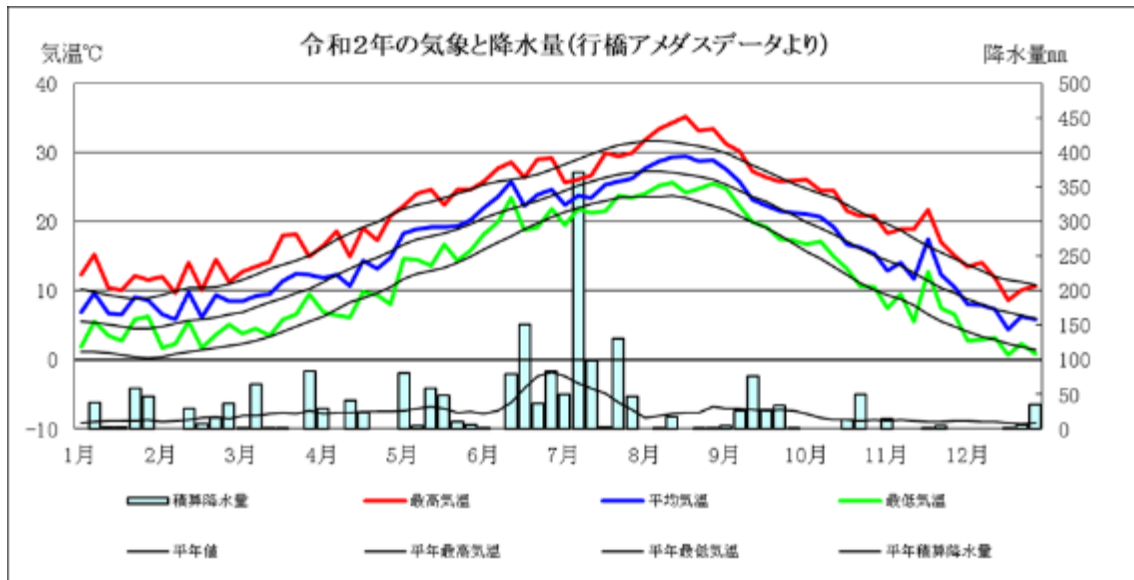
6月は暖かい空気に覆われやすく、晴れて強い日射の影響を受ける日もあったため、統計開始以降、最も高温となった。

7月は「令和2年7月豪雨」の発生や記録的な長雨もあるなど降水量は、統計開始以降、最も多かったほか、気温は低くなった。

8月は平年より強い太平洋高気圧に覆われたことからかなりの高温となった。

9月は日照時間は少なかったが、10月以降は移動性高気圧に覆われやすかったため、日照時間は多かった。

12月は強い寒気の影響で低温となったほか、大陸からの高気圧に覆われやすかったことから降水量は少なかった。



## 6 参考資料

### ■主な品目の生産概要

#### 普通作

##### ○ 水稲

早期水稲の移植は5月10日頃がピークとなった。4月に移植したほ場は移植後の低温により活着が遅れたが、5月上旬からの高温で生育が早く進んだ。その後、7月上旬から低温・寡照・多雨で推移した影響で草丈は平年より長くなったが、茎数は平年より少なく、出穂期は平年並みとなった。成熟期も平年並みで、穂数及び全籾数が少なく、また高温の影響で登熟も劣り、収量は少なく、白未熟粒の発生で品質も低下した。

普通期水稲の移植は6月7日頃がピークとなったが、移植後、6月の高温多照で苗の活着は良好であった。その後、7月上旬からの低温・寡照・多雨の影響で軟弱徒長の生育となり、草丈は平年より長く、茎数は平年より少なく、出穂期は平年より2～3日程度遅くなった。8月以降は高温少雨で経過、9月には台風が接近、さらにトビイロウンカ被害が多発した影響により登熟はかなり不良となった。成熟期は平年並みであったが、穂数及び全籾数は平年より少なく、収量がかなり低く、また充実不足及び乳白米の発生が多く品質も大きく低下した。特に、例年1等米比率が高い元気つくしも品質が悪かった。

##### ○ 麦（令和2年産）

播種は11月初旬から始まり、播種期間が概ね天候が良好であったため順調に進み、12月末までにほぼ終了した。播種後は、1月から2月にかけて記録的な高温になるなど暖冬であったため、生育がかなり進んだ。草丈は平年より長く、降雨が多かったため踏圧等の管理作業が十分できず茎数は平年並みで推移した。莖立ち期、出穂期とも平年より2週間程度早く、成熟期も平年より1週間程度早かった。出穂後は好天のため登熟が良好で、穂数は平年並みで、収量は前年並み～やや少ないが平年より多く、品質も良好であった。

##### ○ 大豆

今年は梅雨入りが6月11日（平年より6日遅い）、梅雨明けは7月30日（平年より11日遅い）で、7月は降雨が平年よりかなり多かった。6月23日から播種作業が始まったが、7月の断続的な多雨で播種作業が出来ず、適期（～7月20日）に播種できたほ場は全体の6%程度、7月末で40%程度であった。8月以降の播種が多く、8月20日頃終了した。また、播種後8月の乾燥で生育量が十分に確保できず、主茎長が短く、莢数も少なかった。収穫は11月12日から始まり、好天で作業は順調に進み、11月末時点での収穫割合は44%程度で、集落営農組織等では麦播種と並行して収穫作業が行われたが、年内にはほぼ収穫は終了した。9月下旬から10月にかけて少雨多照で経過したため子実肥大は良好で、収量は平年並みとなり、大粒比率は高く、1等比率が48.5%であった。

#### 野菜

##### ○ イチゴ

令和元年度の1月以降の栽培は、日照が寡少で気温が高かったため、花数が減少し、果実が小玉で収穫終了まで収量が伸び悩んだ。令和2年度については、暖冬傾向で休眠が浅くランナーの発生本数が少なく、採苗終了は例年より遅かった。梅雨明けが遅く防除不足のほ場では炭そ病が急激に発生拡大したが、育苗管理を徹底しJA内で苗供給が調整できた。定植以降は、10月の乾燥と気温が高かったことで小玉傾向となり12月までの収量は例年よりやや少なかった。

##### ○ レタス

令和元年度の1月以降の栽培では、気温が高く推移し生育が2週間～1か月進んだため、取り遅れが発生し、一部ではほ場廃棄したところが見られた。令和2年度については、8月の気温が高かったことから

発芽不良が発生した。9月の台風の影響で定植時期が遅れた。10月以降は、降雨が少なく生育が抑制され、小玉となったほ場が見られたが、かん水が行われたほ場では大玉率が高くなった。

### ○ スイートコーン

育苗では一部まき直し等が発生したもののおおむね順調であった。

定植は順調に行われ、一部で霜害が発生したが、栽培管理の徹底により被害は少なかった。

5月の乾燥の影響でやや生育が遅くなったものの、例年並みの収穫量となった。

### ○ 夏秋なす

4月下旬から定植が始まり第1果収穫は6月上旬と例年よりやや早かった。

梅雨の長雨や8月の乾燥、9月上旬の台風が影響し栽培期間を通して生育が弱いほ場が多く、収量は前年より大きく減少した。

## 果樹

### ○ イチジク

「蓬莱柿」の発芽は4月7日で昨年より5日程度遅く、収穫開始時期は平年よりやや遅かった。梅雨明け後の高温乾燥により、収穫初期は小玉果が多く、収穫ピーク時には高温障害（つむり果）が多発した。

### ○ モモ

満開期は前年に比べて0～4日早かったが、バラツキが大きく開花不良も散見された。収穫期に降雨が続いた「あかつき」で果実糖度の低下や落果がみられた。せん孔細菌病は平年並みに発生し、台風9号・10号通過後に多発した。

### ○ キウイフルーツ

キウイフルーツ「甘うい」の満開日は5月11日（前年5月8日）で、果実肥大は昨年並みと良好であった。樹勢が弱った樹では裂果が散見された。7月中旬以降の大雨による湿害症状、8月以降の高温乾燥による葉枯、日焼けが生じ、落葉が激しい場合は枯死する樹もみられた。

### ○ ナシ

満開日は前年並みであったが、バラツキが非常に大きかった。満開後30日が低温で推移したため果実肥大が劣り、小玉傾向となった。豊水等で水浸果が発生した。

### ○ ユズ

着果量は平年並～やや多かったが、樹ごとのばらつきが非常に大きく、夏季の高温乾燥のため果実肥大は昨年より劣った。病害虫の発生は全体的に少なかった。

### ○ カキ

着蕾数は昨年と比較して多かったが、果実肥大は平年並み～やや小さくなり、糖度は台風等による落葉の影響から低い傾向であった。生理障害として8月の高温乾燥による日焼けが多発した。

### ○ 中晩柑

着果量は平年並み～やや多い。9月の乾燥等により平年と比較して高糖高酸傾向であった。

## 花き

### ○ ホオズキ

芽出しは2月下旬から始まり、3月下旬頃には完了、発芽揃いは良好であった。4月上旬から下旬にかけて低温となり初期生育が抑えられ、草丈の伸びは悪かった。エスレル散布時期の気温は低く経過し、着色は概ね良好であった。本年は、雨天が続く中、白絹病の発生は少なかったが、軟腐病や斑点細菌病、炭疽病が発生し、品質低下の要因となった。

## 6 参考資料

### ○ キク

8月出しギクについては、白さび病の発生も少なく順調な生育であった。例年、7月に入ると高温により開花が抑制されるが、本年は梅雨明けが遅れ7月下旬が低温となったことから、出荷が前進化し、盆時期のキク出荷が減少した。

### ○ ケイトウ

8月出しケイトウのJA共同育苗は、5月8日に播種し、約20日間で本葉4枚の定植苗となった。定植は6月初旬より行われたが、平年より2週間程度早い6月中旬から発蕾が始まり、平年よりも短く、わき芽の発生、奇形花が多いほ場が認められた。早期発蕾による出荷時期の前進化が予想されたが、花首が固まらないほ場も見られ、出荷量減少の要因となった。

### ○ シンテッポウユリ

JA共同育苗により良質苗が生産された。定植は4月中旬～下旬の適期に行われ、初期生育は概ね順調であった。長雨の影響で葉枯れ病の発生が懸念されたが全体的には少なかった。7月下旬から8月上旬の需要期の出荷となり、草丈、輪数とも十分確保され良好な品質であった。

## 畜産

### ○ 酪農

飼養頭数がやや減少したため、生乳生産量は前年より減少した。

### ○ 自給飼料

イタリアンライグラス：4月の低温の影響で収量はやや減少した、収穫時期に好天に恵まれ品質は良好であった。

WCS用稲：7月の長雨やウンカ被害により収量は減少した。

## (2) 現地活動情報一覧

No.	情報テーマ	作成月日
1	甘くておいしいスイートコーンをお届け！	6月11日
2	大豆の播種作業は機械の適正な設定・調整から	7月 3日
3	<small>しんでんぼる</small> 新田原特産の桃出荷始まる！	7月 7日
4	新田原果樹部会が3密を避けて担い手講習会を開催！	7月15日
5	農事組合法人今津の里が農作業安全研修会を開催	7月17日
6	「京築特産花き」の出荷が最盛期	7月31日
7	イチゴ新規就農者の支援充実に向けて	8月18日
8	レタス部会の担い手を対象に個別面談を実施	8月27日
9	特殊石灰資材を用いた屋根白色化による暑熱対策	9月24日
10	京都4Hクラブが「儲かる」研修会を開催	1月 4日
11	樹園地評価基準を作成し、新田原果樹部会で活用！	1月 8日
12	J A福岡京築で夏秋なす栽培推進！	1月15日
13	有限会社田中農産が全国麦作共励会で農林水産大臣賞を受賞	1月20日
14	盆用花きの作付けが始動	1月27日
15	夏秋なす新規生産者向け講習会を開催	2月16日
16	パン用小麦「ミナミノカオリ」の現地講習会を開催	2月18日

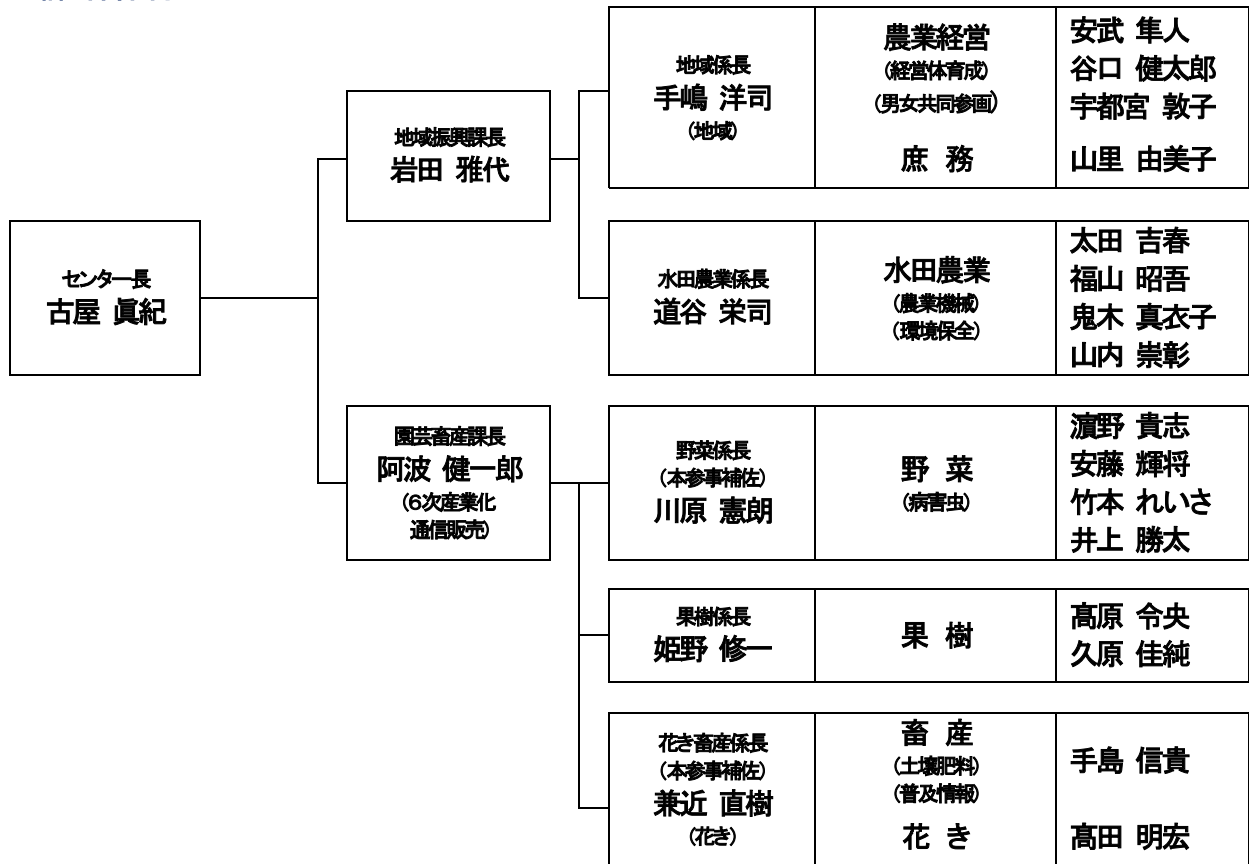
内容は、福岡県ホームページ「令和2年度京築普及指導センター活動情報」から閲覧できます。

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/2keichiku-katudo-joho.html>

## 6 参考資料

### (3) 普及指導センターの活動体制

#### ■課・係体制



#### ■班活動の体制

##### ○プロジェクト班

京築農業人づくり推進班	総括：岩田 推進員：手嶋 班員：安武、谷口、宇都宮、道谷、濱野、姫野、兼近
水田農業担い手育成推進班	総括：岩田 推進員：道谷 班員：谷口、福山、太田、鬼木、山内
園芸農業育成推進班	総括：阿波 推進員：川原 班員：宇都宮、安藤、竹本、井上、高原、兼近、高田

##### ○センター内運営事項における推進班

担い手育成推進班	総括：岩田 推進員：手嶋 班員：安武、山内、井上、高原
普及情報推進班	総括：阿波 推進員：手嶋 班員：宇都宮、太田、竹本、久原
経営体育成推進班	総括：岩田 推進員：安武 班員：宇都宮、道谷、川原、姫野、兼近
環境保全・食の安全推進班	総括：阿波 推進員：福山 班員：谷口、鬼木、安藤、高田



○市町連絡会議等担当班

市町名	課長	地域係	各係・部門
行橋市	岩田	宇都宮	必要に応じ、市町連絡会議等の 会議へ参加
荻田町	阿波	宇都宮	
みやこ町	阿波	手嶋	
豊前市	阿波	谷口	
吉富町	阿波	安武	
上毛町	岩田	谷口	
築上町	岩田	安武	

■普及指導センター職員



安武 安藤 井上 鬼木 高原 山内 谷口  
 濱野 宇都宮 竹本 久原 高田 太田 福山 手島  
 姫野 手嶋 岩田 古屋 阿波 川原 兼近 道谷





## 福岡県行政資料

分類番号 PA	所属コード 4703605
登録年度 02	登録番号



## 福岡県行橋農林事務所 京築普及指導センター

〒824-0005 福岡県行橋市中央一丁目2番1号

TEL (0930) 23-4215 / FAX (0930) 23-8290

URL <http://www.pref.fukuoka.lg.jp/soshiki/4705401.html>

E-mail [keichiku-dlc@pref.fukuoka.lg.jp](mailto:keichiku-dlc@pref.fukuoka.lg.jp)